

歴史を語る建物たち

第15回

今日、20世紀型の開発優先社会は終息を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建築物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分に有る古い建物から、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建築物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的背景やエピソードなどを紹介する。

日本料理「千歳館」(山形市)



山形市の中心部にはほど近い、「花小路」と呼ばれる繁華街の一角に、木々に囲まれた洋風建築の建物がある。

大正4年に建築された日本料理「千歳館」である。

山形県知事が命名

明治9年初春、山形市内で代々魚問屋の五十嵐重吉を営んできた御代澤吉兵衛が、両河銀行(現在の山形銀行)本店の裏通りにあった料理旅館・小悦屋の跡を継いで「きわたりや」を開店した。その後、第3代山形県知事・柴原錦(柴原が着任した明治19年に、邸名を景知亭と改称された)から「千年の歳月が流れても栄え続けるように」との意味を込めて「千歳館」の名を授かった。政治家も多く訪れ、特に書家でもあった副島種彦は、掛け軸など多くの書を残している。

しかし、別の場所に移転した後の明治44年5月8日、当時の山形市北部の大手を焼き尽くした市北大火に当たって、館宇や蔵所などとともに千歳館も全焼した。そして、大正4年、2代目御代澤吉兵衛が現在地に千歳

館を再建した。

なお、再建当時、周囲は一面途地だったことから、吉兵衛は番頭や中層、出入りの商人などに、それぞれ館の近くに店を持たせ、にぎわいを醸した。やがて、外部からも客を持つ者が流入してくるようになり、番頭は一般、山形市随一の繁華街「花小路」となった(花小路の名前は吉兵衛が命名)。

また、建物もユニークな造りで、西側は正面に車寄せを持つ洋風建築、東側は四季折々の木花を兼ねた中



当時のカフェ・レストラン入口。建物の外観は洋風建築で、内部は和風。写真左側の「千歳館」の看板は、明治9年に建てられたもので、現在も残っている。

庭を持つ純和風建築となっている。それと合わせるように、吉兵衛は科学の館に、一流コックを揃えて建物の一部をカフェレストランにした。

現在の外観を築める洋風好きさんは、「2代目(吉兵衛)とはとにかくハイカーな人でした」と述懐する。

激動の時代と共に

大正時代から昭和初期にかけて、わが国では政治状況が激変であった。とりわけ、2大政党である民政党と政友会の政争は目に及ぶまで激しさを増していった。千歳館は民政党の拠点として、しばしば会合が開かれていたが、それが密にいう密談であったことは想像に難くない。

また、戦時中は一時休業を余儀なくされ、陸軍予備学校として徴収された。戦後も食糧をGHQに提供するため、専用パーに使われたりしたため、本格的な営業再開は昭和23年まで待たねばならなかった。

その後、昭和60年と平成12年に大規模な改装を行ったが、建物の姿はそのままだに、95年あまりの歴史を今に伝える。



戦後、営業を再開した千歳館。GHQは魚問屋などから、業界を突いたすき焼きパーティーを好んだという。資料：総で見える千歳館百年史(千歳館)

ライトアップで地域貢献

外観のライトアップが毎朝か毎夜はライトアップされる。一層幻想的な雰囲気を醸し出す。

普通のお店では、営業が終わると電気も消してしまうところが多いが、千歳館は営業終了後も夜12時まで明かりを付けている。休業日も同様だ。

その理由について、澤渡さんはこう話す。「この明かりが消えたら、辺りは真っ暗になります。それで良いのでしょうか。私たちは地域に支えられて営業を続けています。その置かれている立場を考えた場合、確かに光熱費はかかりますが、せめて通りを明るくすることで地域貢献ができればと思います」

なお、地域のシンボルの存在でもある千歳館は、多くの作品のロケ地に使われる。浅野ゆづり、山下真由など、ロケで千歳館を訪れた俳優は枚挙にいとまがない。一方、ロケで千歳館を訪れていた村川通監督(村山市出身)は千歳館とも親交があることから、其共時に

「ボランティアだ！貸せ！」と言って、ロケ隊が客舎を借りるのに千歳館を「勝手に」(澤渡さん)使ったエピソードもある。澤渡さんは、その時の様子で「主役の喜劇的喜劇が、降参までおとなしくお客舎を貸していたのが印象的でした」と話す。

保存は容易では無い

千歳館は、平成14年に国の登録有形文化財に指定されたが、そこには澤渡さんの、建物を後世に残したいという、強い思いが込められている。「当時海外にいた息子が、帰国して(建物を)壊してしまえば大変だと思いました。登録有形文化財に指定されれば何らかの規制が緩くなりますので、壊れぬように「先手」を打ったのです」と話す澤渡さんだが、心配に反して(?)現在は千歳館の保存・管理に専心する息子の姿に目を留める。

しかし、「保存、継承と口で言うのは簡単ですが、実際にはとても大変なことなのです」と澤渡さんは強調する。

事実、登録有形文化財制度は、若干の行政補助はあるものの、基本的には所有者の自発努力だ。千歳館も、トイレの改修やブロック塀の撤除など、建物の維持費だけで年間数百万円かかるという。澤渡さんは、「そうした費用は、営業努力によって捻出するしかありません」と言い切る。

30年以上続く中庭でのビアガーデン(夏間)のような企画イベントや、農事・町事・宴会などへの臨場必要な対応といったサービスの充実はもちろんのこと、観光で訪れた団体ツアー客にも、澤渡さん自ら建物の説明をして、「ぜひまた、別の機会に当館を訪れてください。そうでないとうち館は持ちません」と冗談交じりにPRすることで、お客さまにも建物の価値を知ってもらう努力も怠らない。

筆者はそこに、「建物を保存すること」の本質的な意味を再問した気がした。



きざでなければ、客はずまず支那寺の神倉室に遷される。一見豪華な内装のようにもみえるが、澤渡さん「壊れたいだけでいいことも科学の道ごじ方」と話す。(筆者撮影)